

ウイットとポエトリー

早乙女 忠

表題にウイットとポエトリーと二項対立のように掲げたが、究極のポエトリーはウイットではないかというのが私の考えである。そこでウイットとは何かを突詰めて考える必要があるが、たまたまイギリス十七世紀の詩に見られるウイットについて、さまざまな定義を並べた文章を読んだので、まずその定義の力タログを引用しておきたい。

巧妙さ、奇想、擬似論理的な主張、創意、極端な詭弁、器用な職人芸、軽妙な言語遊戯、パロツクの過剰、不可解なイメージャリー、不自然な比喻、ただの才気、ヒューマーと駄じゃれ、標準的文彩の敏活な操作、似ても似つかぬ現象間の予期せぬ類似物の刺戟的な発見、創造された世界の秩序と結合の感覚、薄くヴェールを掛けられたように時に応じて知覚され

る真実。(1)

「巧妙さ」、「器用な職人芸」のようなあいまいな規定や、「ただの才気」のような批判的な評価を含むが、こつした定義一覧は十七世紀文学の領域を超えて広く適用できるのではないだろうか。『オクスフォード英語辞典』は、ウイットを「予期しがたい着想により、驚きと喜びをあたえようと意図した思考と表現の適切な結合に基づく談話また記述」と定義をしている。「予期しがたい着想」と「驚きと喜びをあたえる」がウイットの特質また眼目である。このことが前記した諸定義と重なる。これに対して同辞典はポエトリーを次のように定義する。「美しくまた高揚された思考、想像、感情の表現または具体化。そのため言語は直接的に、あるいはさまざまな語や語句が生みだす調

和にみちた暗示によって情緒や想像をかきたてるように使われ、通常リズムカルな言語が韻律形式によって形成される」。同辞典はウイットという語の用例としてドライデン、ロック、ポーブ等の文章を、ポエトリの用例としてシドニー、ジョンソン博士、ワーズワス、イエイツ他の文章を引用している。ジョンソンの用例は、「詩の本質は創意である。創意は、予期せぬものを生みだすことによつて驚きと喜びをあたえる。……詩は事物を描写することよりも、精神に快適な思考を促すことによつて喜びを付与する」というポエトリの本質規定の箇所だが、この文言が『オクスフォード英語辞典』によるウイットの定義の中核をなしていることに注目したい。

ウイットに対抗しうるポエトリとしてここに引きたいのはアーネスト・ダウンソン（一八六七—一九〇〇）の「シナラ」の詩である。ウイットを欠く言語芸術は存在しないだろうが、この暗鬱な恋愛詩は、純粹なポエトリに可能な限り近付こうとする。以下に名訳の誉れ高い矢野峰人訳を挙げる。

今やわれシナラの下にありし日のわれにはあらず

昨夜、ああ、昨夜、たはれ女とかたみにかはず接物を、
あはれ、シナラよ、なが影のふと遮りて、その息吹
えひほつけたるわが靈の上に落つれば、

われはしも昔の戀を想ひ出てここちなやまし、
さなりわれうらぶれはてて額垂れぬ。
われはわれとてひとすぢに戀ひわたりたる君なれば、

あはれシナラよ。

終夜わが胸の上にその胸の鼓動をつたへ、
よすがらわれにいだかれて甘睡むすべりたはれめは、
一夜妻なれ、その紅き唇のあまさよいかならむ。
さはれ、昔をおもひ出てわれうらぶれぬ、
むすびかねたる手枕の暁の夢さめしとき、
われはわれとてひとすぢに戀ひわたりたる君なれば、

あはれシナラよ。

われは多くをうちわすれ、シナラよ、風とさすらひて、
世の人々と狂ほしく薔薇を投げぬ、く薔薇をは、
色香も失せし白百合の君が面影忘れんと舞ひつ踊りつ。
さはれ、かの昔の戀に胸に胸いたみここちなやまし、
そのをどりつねにながきに過ぎたれば、

われはわれとてひとすぢに戀ひわたりたる君なれば、

あはれシナラよ。

いやくるほしき樂の音を、またいやつよき酒呼べど、
宴の果てて燈火の消えゆくときは、

シナラよ、あはれ、なが影のまたも落ち来て夜を領れば、
われは昔の戀ゆゑにここちなやみてうらぶれつ、
ただいゝあかき唇を戀ふるころぞつゝのるなれ。
われはわれとてひとすぢに戀ひわたりたる君なれば、

あはれシナラよ。

ダウソンは病弱で結核におかされて三十三歳の若さで世を去る。「シナラ」の詩を病める青春の詩と稱する他ない。ダウソンの作品は退嬰的に見えるとはいへ、純粹な情緒の表現に結晶し、これをポエトリーの一典型と呼ぶことができる。

次にウィット溢れる老人の詩を引きたい。スウィフト（一六六七—一七四五）が七十二歳の時書いた「スウィフト博士の死についての詩篇」の一節である。

見よ、首席司祭が崩れかかる様を！

気の毒に！ 彼は速かにしおれてゆく！

それは彼の顔の中に、はつきり読みとれる。

彼の頭蓋の中のある痼疾、眩暈は、
死ぬまで彼にとりついていることだろう。

かつ又、彼の記憶力は朽ちて、

自分の言ったことも忘れてしまい、

友達のこととも思い出せず、

食事をした場所も失念してしまふ。

同じ話を何度も何度も話して、君を困らせる
以前、五十回も話したことがあるのに。
時代遅れのしゃれを、われわれが最後まで
我慢して聞いていられるなんて、
どうして彼は思うのだろうか？

J・B・フリーストリー『英国のユーモア』に引用された小池・君島両氏による邦訳を利用する。『ガリーヴァー旅行記』の作者は七十代になつて持病の眩暈が悪化し、後発狂したと伝えられる。これは自分の老衰ぶりを諷刺した詩句だが、總じて諷刺詩には目立つた誇張があると言われている。スウィフトの詩の表現にみちている誇張を単に誇張ととらずに、それはウィットであり、スウィフトはウィットによっておのれの人生を支えたと解したい（ついに精神の病魔に耐えきれなかつたが）。ウィット溢れるすぐれた詩人としてジョン・ダン（一五七二—一六三二）を考えてみたい。二十世紀になつてダンの詩を称揚し、ウィットの何たるかを示したのはT・S・エリオットである。エリオットの鋭く適切な批評が長くダン研究の趨勢を支配した。エリオットのジョン・ダン評を一部引用しよう。

ダンらしい巧妙な詩的技法は、短い語と唐突な対比によって
効果をあげる。次の一行を見よ。

骸骨にからまる金髪の腕輪、

ここでは「金髪」と「骸骨」の対照の急激な連想によって強力な詩的成果が生れる。(2)

引用されている「埋葬」と題される作品の一行は、「予期しがたい着想」に基き、それによって読者は「驚きと喜び」の感情に浸される。死んでなお愛欲に取りつかれた一人の男の姿が示され、しかもエロスはウイットによって高貴な光を放っている。エリオットは同じ論者のなかで単一なイメージではなく、連続した精巧で唐突な比喩にも触れている。ダンの詩で最も有名な「別れ 嘆くなど諫める」がその適例として言及されるが、ここでは後半部だけを掲げ、さまざまな比喩の連鎖ではなく、ダンの比喩の伝統性と斬新さについて考察したい。

ぼくたち二人の魂は一つのものなので

ぼくが君のもとから旅立っても

離れもせず、打って薄く延ばした

金箔のように拡張する。

ぼくたちの魂が二つの存在なら

コンパスの二本の脚のように二つである。

君の魂は固定された脚で、動く気配はなく

他の脚が動くのに従って動くだけだ。

固定された脚は中心に座しているが、
他の脚が遠くさまよう時に

その方向に傾斜して様子を聞くとするが、
戻ってくれば、いつしよに眞直ぐ立つ。

君は中心の脚のようになってほしい。

ぼくは他の脚のように体を傾けて走る。

君が動かなければ、ぼくは

正しい円を描いて出発点に帰る。

コンパスの比喩は、ダンの詩の新しさを語る時つねに取上げられる。しかしコンパスのイメージの使用はダン以前に先例があった。肝要なことはコンパスが円を形成するところにあるだろう。完全な円は、ダンテやフィレンツェの初期ヒューマニストが愛好し、円の中心に座するのは天使であると考えられていた。ダンテの『新生』のなかで、愛の神が天使の装いをし、「私は円の中心として存在する」と語り、神曲の『天国篇』十九歌では、神が幾何学者のようにコンパスを使って世界を創造する。やがて十五世紀になると円と天使は分離し始める。ダンには天使の位置に自分の恋人（または妻）をおき、男女二人の恋人がみずからコンパスとなって、「別れ」の不安を克服しようとする。「ぼく」という人物がもし詩人ならコンパスによって詩の世界を創りあげたのであり、詩的創造を天地創造に譬えた口

マン派美学をダンは一先取りしたことになる。ダンはここにエロスの祝福を描いたが、それは幻想に過ぎなかった。最後に「君は中心の脚になってほしい」と懇願するばかりだった。「夢」と題される詩もエロティックな夢の達成を意図しながらここでもそのことは幻想に終る。⁽³⁾

いとしい人よ、君が起してくれるのでなかったら

ぼくはこの幸福な夢から醒めたくなかった。

それは幻想と言えぬような、

理性に相応しい主題の夢だった。

それゆえ理性の主である君が起してくれた。

君は真実の人であり、君のことを思えば

夢は真実に、物語は歴史になる。

ぼくの腕に抱かれるがいい。君はぼくがひとり

夢を見るのを窘めたのだ。さあ夢の続きを演じよう。

物音ではなく、稲妻や蠟燭の明かり

のような君の目がぼくを起した。

だがぼくは（君は真実を好むから）

君を見て天使かと思った。

しかし天使以上だった。君はぼくの心を知り、

ぼくの考えに気づいていることをぼくは知った。

ぼくの夢の内容を知り、喜びのあまり
目覚める頃合を知って、君はここに来た。
だからぼくは言っておきたい。君を
君ではないと考えるのは不埒なことであると。

ここですつといてくれれば君は君だが、
ここから立去ってしまった。

君は君ではないとぼくは考えてしまふ。

愛に不安があれば、それは愛とは言えない。

愛が不安、羞恥、名譽の混合物なら

純粹で輝かしい心の働きとは言えない。

松明がすぐ燃えるように、一度火を点して

消しておく。君もそうしようとする。

ぼくに火を点して消し、ふたたび訪ねようとする。

それを夢見よう。そうでなければ死んでもいい。

語り手が見た夢のなかに愛する人が現れた。恋人は天使のような存在だから、天使が駆使する知力（ここでは理性）に相応しい夢を見た。追従の言葉を並べる。天使は光そのものであり、その光が恋人の目から放たれて語り手は目を醒ましたと言った。しかし恋人は天使以上の認識能力を備えていた。天使以上の存在なら、神なのだろうか。ダンはここでも恋人の援けを借りて神的能力に譬えうる想像力を發揮しようとする。しかしこの詩

には語り手が誘惑の言葉を混入させ、「ぼくの腕に抱かれるがいい」、「夢の続きを演じよう」、「(君は)ぼくに火を点して消し、ふたたび訪ねようとする。……そうでなければ(ぼくは)死んでもいい」と言い続ける。この詩の特色あるいは魅力はエロスの神秘主義と現実主義の落差にあるだろう。ダンの作品は女性の賛歌なのか誘惑の詩なのかとよく論じられる。愛に関する理想主義と都会風な青年の欲望、憧憬と挫折、両者は差異を形成しながら共存しているのだ。そのために意識と言葉は複雑な動きを見せ、作品が終了するとともにそれらが突然中断するという印象を拭うことができない。

マリオ・ブラーツの次の文章は、そつした状況を広く芸術の問題として巧みに説明している。

ダンの抒情詩の屈曲を重ねるパターンを見ると、その最大の特徴を彼の奇想と機知だと言つことは、なるほど目を惹くのがそつしたものであることにちがいないとしても、むずかしいだろう。……(それを)たどつていけばペトルルカにまでいきつくだろう。ダンは、ペトルルカスモの主題要素を使っていることはたしかだが、……偏倚かつ非正統的な使い方なのである。私自身、別のところで、ダンの詩法とマニエリスムの画家たちとの共通点をいくつか論じ、とりわけ余計な細部が増殖し、他の詩人たちの普通の詩法が転倒されていく点にそれを見た。ダンの屈曲する思考の流れは、何かを言つと

どこかの行の冒頭の「しかし」がそれを転倒するという形をとることが多い。(4)

ブラーツはダンの詩の最大の特徴をウイットに求めるのは難しいと断定するが、ポエトリーに対するウイットは、古典主義に對するマニエリスムの関係に似ている。ウイットは知性の活力によつて詩的伝統から離反し、意識と表現がゆがみ、ねじれた様式である。ブラーツは細部の増殖と「しかし」による行文の転倒をダンの詩の特徴として指摘する。

ブラーツの著述は一九七〇年に刊行されたが、その四半世紀前グスタフ・ルネ・ホッケが「シェイクスピアからクラッショーにいたる英国文学は創造的な意味で、ヨーロッパ・マニエリスムの頂点をなす」と書き、⁽⁵⁾マニエリスム文学を言語の迷宮と言いつき、言語形式として再転三転する方向転換を重視している。他方ホッケとほぼ同時期に、イギリス現代詩人のトム・ガンが青年としてダンを耽読し、深い影響を受けた(悪い影響もあった)ことを後年回想している。そのなかでガンは、「詩はもっぱらイメーヂからなると主張する英米双方の批評家とは逆に、語りを二十世紀の固有なものとして受容した」と語るのである。

ダン は 後年セント・ポール大聖堂の首席司祭に選出され、説教者として名を成すが、宗教詩人としても力強い詩を書いている。マニエリスム詩人たるダンの宗教詩は、やはり「屈曲する

思考」と「余計な細部の増殖」を見せている。次はその一篇である。

三位一体の神よ、私を強打し給え。これまで

あなたは矯正のため、たたき、息をかけ、光を注ぎ給うた。

私が起き、立つために私を倒し給え。

打ち破り、吹き飛ばし、燃やし、新たな者にし給え。

私は正しい支配者の配下なのに敵に占拠された町、

あなたを迎え入れようにも、それができない。

あなたの代理人の理性が守るべきなのに

私は俘虜の身、脆弱、不実な態度をとっている。

だが私はあなたを愛し愛されることを願う。

しかしあなたの敵と契りを結んでいるのだ。

私を別れさせ、閉じこめ給え。なぜなら

あなたの束縛がなければ、自由になれないし、

陵辱されなければ私は純潔になれないのだから。

最初の四行連句で、扉をたたき、暖い息を吹きかけ、光を注ぎ給う恩寵に対し、扉を打ち破り、存在を吹き飛ばし、肉体を焼き給う聖なる怒りがレトリック的に対比され、ダンの世俗への執着と聖なる世界への憧れが不可分なものとして描かれる。最後の対句は批評家によって何度も引用されるが、その逆説とウィットははなはだしく称えられながら、常識ある人たちの舌

打ちを蒙っているのではないだろうか。しかし倫理的なタイプへの挑戦はダンの詩の一部なのである。

ブラーツはダンの宗教詩も分析しているが、その場合、ミケランジェロの宗教詩に匹敵するという論じ方をする。

(ミケランジェロが)唯一似ているという感じなのはジョン・ダンの『神聖ソネット集』である。二人の詩人に「発心が訪なうは狂おしき瘡りもさながら」なのであって、信仰心が得るにむずかしいものだを知った二人は熱狂に弛緩のくることを怖れてばかりいる。二人とも心の渇きをなんとかしようとして、神のみがなすことのできる壁が自分の心と神を隔てていると感じている。リアリズムとネオ・プラトニズムの奇妙な混淆ぶり、賦才の劇的性格、美と宗教に対する苦しい憧れ、半ば勝ちながら半ばは挫折するという闘争の二重性、そして罪と死の恐怖、神の怒りの招く怖るべき結果を描きだす力ということでは、ジョン・ダンがおそらく誰よりもミケランジェロに近いであろう。

信仰心をわがものになしえたかと思うそばからそれが崩れて、直ちに神の怒りを(怖れつつ)待つ分裂症気味の心理、それゆえにたえず訪れるはげしい「心の渇き」、そつした意識の推移は、世俗詩にあった果てしなく「屈曲する思考」に対応する。おのずから詩的結実とは伝統的な詩法と文体を転倒させるのである

う。

ジョン・ダン研究史はドライデンとジョンソン博士に始まるだろうが、ジョンソンは『イギリス詩人伝』中の「カウリー伝」で、「屈曲した」詩といえるウイットを俎上に載せる。

形而上詩人（ジョン・ダン一派）は学識豊かで、学識を示すためにもてる力の限りを尽した。……

批評の父（アリストテレス）が、詩をテクネー・ミメーティケー、つまり模倣の術と呼んだのが正しければ、形而上詩人が詩人と称される権利を失うと言っても差支えない。彼らは何も模倣しなかつたのだ。自然も人生も模倣していないし、ものの形態を描いたり、知性の働きを表現したこともない。

しかし彼らが詩人といえないと考える人たちも、形而上詩人を才人であることを認めるのに奮かではない。ドライデンはウイットに関して、自分も自分の同世代人もダンに劣ると告げるが、詩ではダンを凌ぐと主張する。……

しかしウイットは、かりに聴き手に対する効果を捨象して言えば、厳密かつ哲学的に、一種の不調和の調和であると考えることができる。それは相異なるイメージの結合、一見似ても似つかぬ事物のなかに隠された類似物の発見なのだ。ウイットをそう定義すれば、形而上詩人はウイットを充分以上に備えている。最も相異なる観念が暴力的に軛で繋がれているのだ。

自然と人工が説明と比較と比喩のために漁りつくされる。彼らの学識が聴き手を教示し、彼らの巧妙な技法が驚異をあたえる。しかし読者は啓発されても、そのことを辛じて手に入れたと考え、賞賛することがあっても詩を楽しむことはめつたにない。⁽⁶⁾

ジョンソン博士がウイットを、「一種の不調和の調和」と哲学的に考察し、「最も相異なる観念が暴力的に軛で繋がれている」と説明したことは広く知られている。形而上詩の本質と魔法を端的に解明したのであり、T・S・エリオットもそうした定義や説明を利用する。しかし形而上詩人は自然や人生を模倣することなく、詩が模倣の術であるからには彼らは詩人とは称しがたいと評するのである。だがダンは自然や人生を真に模倣していないだろうか。すでに見たように、ダンは「屈曲する」意識や心理を充分「模倣」しえ、プラーツのごときはダンの宗教意識をミケランジェロの苦悩の表現に対比していた。ダンはいかに限度を超えておのれの心的動揺を模倣しただろうか。またジョンソンはダンの読者に「教示」、「驚異」をあたえるが、「楽しみ」を付与することはないと結論する。ダンの詩から楽しみが消失したというよりは、ダンの詩を読む楽しみが複雑なもの、演劇的なものに変貌したと考えるべきであろう。「楽しみ」の領域が深化、拡大したのである。

二十世紀になると、ジョンソン博士に傾倒するT・S・エリオットも伝統的なヨーロッパを離れた前衛的詩人トム・ガンも、

ホッケもブラーツもジョンソンとは別の途を往くことになる。
一九二〇年代にエリオットはダンのイメージを高く評価してお
のれの作品中にそれを取りこみ、四〇年代にはホッケとガンが
ダンをイメージではなく複雑な語りの詩人として称え、六〇年
代にブラーツがホッケに続いて、ヨーロッパ詩の歴史のなかに
ダンをマニエリスムの詩人として位置づけた。いまやダンを現
代に通じる不安と戦慄を訴え続けた詩人として読んでもいいの
ではないだろうか。比較文学者レナムが、二十世紀を「現実の
手ざわりの稀薄化、存在論的な不安、非存在の戦慄」の時代と
特色づける⁽⁷⁾が、ダンの詩的活動をそれらの言葉が要約して
いるように思われるのである。

注

- (1) Claude J. Summers & Ted-Larry Pebworth(ed.), *The Wit of Sev-
enteenth-Century Poetry* (University of Missouri Press, 1995)
- (2) T. S. Eliot, 'The Metaphysical Poets' (1921) in *Selected Essays*
(Faber, 1932)
- (3) 以下ダンの二篇の詩を分析するが、新たな考察を加えたこ
はいえ、『詩人と新しい哲学 ジョン・ダンを考える』(松
柏社、二〇〇一年)と重複する処があることをお許し願いた
い。
- (4) 高山宏訳『ムネモシユネ 文学と視覚芸術との間の平行

- (5) 現象(ありな書房、一九九九年)
種村季弘訳『文学におけるマニエリスム』(現代思潮社、
一九七一年)
- (6) Samuel Johnson, 'Abraham Cowley' in *Lives of the English Poets*
(Oxford, 1968)
- (7) 『雄弁の動機 ルネサンス文学とレトリック』(ありな書
房、一九九四年)